

機関番号	研究種目番号	審査区分番号	細目番号	分割番号	整理番号
64302	04	1	3003		0001

平成28年度 (2016年度) 基盤研究 (A) (一般) 研究計画調書

平成27年11月 5日
2版

新規

研究種目	基盤研究(A)	審査区分	一般				
分野	人文学						
分科	芸術学						
細目	芸術一般						
細目表 キーワード	表象文化論						
細目表以外の キーワード	情報・複製・美的範疇・器・うつし						
研究代表者 氏名	(フリガナ)	イナガ シゲミ					
	(漢字等)	稲賀 繁美					
所属研究機関	国際日本文化研究センター						
部局	研究部						
職	教授						
研究課題名	「うつわ」と「うつし」：情報化時代の複製技術・藝術の美的範疇刷新にむけて						
研究経費 (千円未満の 端数は切り 捨てる)	年度	研究経費 (千円)	使用内訳(千円)				
			設備備品費	消耗品費	旅費	人件費・謝金	その他
	平成28年度	10,518	1,910	180	4,400	2,028	2,000
	平成29年度	10,582	1,440	714	4,400	2,028	2,000
	平成30年度	11,582	1,440	714	4,400	2,028	3,000
	平成31年度	0	0	0	0	0	0
	平成32年度	0	0	0	0	0	0
	総計	32,682	4,790	1,608	13,200	6,084	7,000
開示希望の有無	審査結果の開示を希望する						
研究計画最終年度前年度応募	--						

研究組織（研究代表者、研究分担者及び連携研究者）

	氏名（年齢）	所属研究機関 部局 職	現在の専門 学位 役割分担	平成28年度 研究経費 （千円）	エフオ ート （%）
研究代表者	40203195 （59） イナガ シゲミ 稲賀 繁美	（64302）国際日本文化研究センター （913）研究部 （20）教授	美学・芸術学・文化交渉史 博士 統括責任者	8,518	30
研究分担者	90351361 （50） オオニシ ヒロシ 大西 宏志	（34319）京都造形芸術大学 （702）情報デザイン学科 （20）教授	映像・情報デザイン 準学士 「情報」分科会総括	400	15
研究分担者	80469618 （45） クラタ タカシ 鞍田 崇	（32682）明治大学 （403）理工学部 （27）准教授	環境哲学 博士 「枠組み」分科会総括	400	15
研究分担者	10323560 （41） ミハラ ヨシアキ 三原 芳秋	（12613）一橋大学 （899）大学院言語社会研究科 （27）准教授	英文学・批評理論 博士 「インドラ網」分科会総括	400	15
研究分担者	20586341 （41） ホリ マドカ 堀 まどか	（24402）大阪市立大学 （923）大学院文学研究科 （27）准教授	比較文学・比較文化・日本文学 博士 「輪廻転生」分科会総括	400	15
研究分担者	70713981 （34） ウド サトシ 鵜戸 聡	（17701）鹿児島大学 （305）法文教育学域法文学系 （27）准教授	比較文学・アラブ＝ベルベル文学 博士 「接触界面」分科会総括	400	5
合計 6 名			研究経費合計	10,518	

研究目的

本欄には、研究の全体構想及びその中で本研究の具体的な目的について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、適宜文献を引用しつつ記述し、特に次の点については、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください(記述に当たっては、「科学研究費助成事業における審査及び評価に関する規程」(公募要領 7 5 頁参照)を参考にしてください。)

研究の学術的背景(本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ、応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯、これまでの研究成果を発展させる場合にはその内容等)

研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか

当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

研究目的(概要) 当該研究計画の目的について、簡潔にまとめて記述してください。

本研究は「うつわ」と「うつし」という和語を鍵言葉として、文化伝承と刷新のメカニズムに関する代替的なモデルを検討し、提唱することを目的とする。従来原典と複製、original と copy の両者を対比させる思考法は、今日の情報化社会で限界を露呈し始めている。だがそれに替わるモデルは、まだ登場していない。ところが IT 革命や電子情報環境の整備に伴い、この 15 年ほどで文化の基礎環境は劇的なまでの変貌を遂げた。制度と現実と仮想現実との三者間には、様々な齟齬や機能不全が発生している。従来想定外の事故や特許横領、情報漏洩が多発し、それに起因する国際紛争すら懸念される情勢を迎えている。ここで「うつわ」(空=現)「うつし」(移・写・憑)、刻印、媒介、共有といった基礎概念の再考が、思考モデルの刷新のために不可欠となる。本研究は多分野から知見を動員し、次世代の表象文化論、情報理論に先鞭をつけるものである。

1. 研究の学術的背景 研究代表者は、平成 25 - 27 年度、科学研究費補助金により基盤研究(A)「海賊史観から交易を検討する：国際法と密貿易 - 海賊商品流通の学際的・文明的的研究」を組織した。その成果は『近代東アジアのアポリア』(徐興慶編：台湾大学出版中心、2013 年)への寄稿「交易の海賊史観にむけて」ほかの機会に台湾や韓国にむけて海外発信した。その総括的成果は『海賊史観から交易を考える』(研究代表者編：仮題)として、社会還元する予定で、現在とりまとめ中である。この研究は平成 22 - 24 年度基盤研究(A)「東洋」的価値観の許容限界：「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶」を受けた継続企画だったが、日本を含めた国際的な文化環境はこの間も急速な変貌を遂げてきた。一方では商品流通を含む国際的な物流において支配的な一元構造が揺らぎ、新たな国際的な規律を模索する動きが官民を問わず活発となっている。他方では IT 産業、情報産業を中心に、従来のモデルを超えた商法や商品が世界的な規模で登場し、しばしば既存の法体系では処理できない社会問題となり、新たな倫理的規範の設定が現実には追いつかない様相すら呈している。基盤研究提案の時点では未知数だった「海賊」という標語も、現在では一種の流行を見るに至った。そこには既存秩序に包含されない可能性への期待と不安とが、代替価値への漠然とした希求とないまぜになって、時代の雰囲気醸成している。そのなかで「海賊史観」の検討は、従来の世界史記述 400 年の枠組みを再検討し 東西交易路での物流における海賊行為を総括するとともに いわゆる欧米による近代的世界支配体制の確立過程を再検討し 現行の著作権、複製権さらには「公海」の規定など、国際法の基礎に探りを入れる傍ら 昨今のサイバー環境におけるハッキング、電子機器をはじめとする商品開発における「海賊版」の横行、欧州における「海賊党」といった政治活動の一斑にも視野を広げ、従来の一元的な「合法性」の貫徹が、法環境および、物流・人流でも著しく困難になりつつある現状を浮き彫りにした。

本研究ではこうした認識を背景として、情報の伝達道具と、伝達方法への抜本的な再考を企てる。その際、従来の欧米語の翻訳には頼らず、日本語にみられる日常的な語彙の再検討から出発する。その理由は、欧米語やその翻訳語に依存するパラダイムからは、海賊史観の検討でみえてきた現実の枠組みを解体あるいは組み替えることが方法論上きわめて困難という認識がある。だがそれは、新たな国学を提唱し、国粹的な唯我独尊に逃避するものではない。その危険性は、すでに「東洋」的価値観の許容限界」で、日本のみならずアジア全域を対象として十分に検討した。むしろ日本列島という、西からの文化伝播の末端に位置した文明の掃き溜め、太平洋を隔てて旧来の植民地独立国と対峙する地域、地震と台風という地学的・気候的特殊性に条件づけられた文化圏の特性を手掛かりとして、モデル構築を目指したい。すでに昨年までの「海賊史観」検討の一環として、研究代表者および研究分担者は、国内のみならずインドやフランスで、予備的な研究集会を実現している。とりわけパリの日本文化会館では 2015 年 1 月に「うつわと写し」と題する展覧会および国際シンポジウムを実施し、文化事象を刻印してそれを次世代へと運搬する「器」と、それに乗って「うつされる」「中身」の「うつし」(すなわち、移動、変質、変貌、憑依)といった現象を、欧州の専門家と集中的に討議した。その成果に立脚し、より具体的・多角的に「うつわ」と「うつし」のパラダイムを掘り下げ、新たなモデルを彫琢してゆきたい。

研究目的(つづき) 2. 研究期間内に何をどこまであきらかにしようとするのか

以上のような問題意識にもとづき、本研究は、研究期間内に以下を解明することを目標とする。

- (1) 哲学的・美学的側面: 「うつわ」と「うつし」という用語によって美的範疇を刷新する。「うつし」は従来の original 対 copy という欧米近代における常識的な二項対立を解消する概念であり、「うつわ」は従来の欧米近代の美学では recipient-receptacle-container と看做され、「本質」とは無関係な「材質」として軽視されてきた。ここからの脱却と paradigm 転換の必要性、うつわ・うつし概念の有効性を明らかにしたい。これは岡倉覚三が先鞭をつけ、九鬼周造が欧州で展開し、坂部恵が継承を試みた問題意識の延長をなす。
- (2) 歴史学的側面: 上記の見直しがなくては、精神の産物としての Fine Arts、二次的な副産物としての applied arts といった欧米価値観の枠組みを見直すことは不可能であろう。アジア・アフリカを問わず、帝国主義時代以来の植民地行政にともなう価値観が、産業革命とも連動して、こうした対立を普遍化・恒常化させ、現時点までの世界的な秩序感覚の一翼を担っている。だが現在進行中の情報革命、物流革命には、この枠組みはもはや対応しておらず、認識刷新が不可欠であることを、社会的に明らかにしたい。
- (3) 技術開発の側面: さらにこの問題意識は、現今求められる「文理融合」にも、ひとつの方向を与える。そもそも文・理の「融合」ではなく、相互の「融通」が不可欠だろう。また第1次、第2次の産業革命以前には ars と techne とは対立概念ではなかった。物質と情報の境界が揺らぐ現在、ars と techne の再統合が急務となる。「器と写し」により、複製の大量生産・大量消費から脱却するための理論構築を目指す。
- (4) 教育提言の側面: 「うつわ」を育て、そこに中身を盛ることの大切さ、それを現場から他の場所へと時空を超えて渡らせてゆく技術。こうした基礎的理解を教育の世界で再確認する学術的要請が、現今の教育行政では等閑視され、表面的な IT 技術習得が自己目的化している弊害を明らかにする必要がある。
- (5) 政策提言の側面: 教育においていかなる人材を「うつわ」として育成し、それによっていかなる文化を次世代に「うつし」てゆくのか。そこでは若年層の減少と人口構成の老齢化や、地方の過疎と大都市インフラの老朽化、物流や情報、人材の交流にいたる、現在の社会にとって重要な問題を、新たな視点にたって再考察するための政策的起点がある。うつわ・うつし文化再興の今日的意義を、明らかにしたい。

3. 当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

- (a) 以上の課題は、いずれも既存の単独の学術領域内部だけでは検討できない複合性を特色としており、既存の学術的了解事項、教育行政の基軸に踏み込む根底的・独創的な扱いが要請される。
 - (b) とりわけ明治期の産業革命以降、抜本的な見直しのされてこなかった基本的な学術上の基礎概念の問い直しを国際的な視野で進めることが不可欠であり、ここに**学術的な独創性**が認められる。
 - (c) とりわけ情報革命、物流革命は、経営学や国際金融論、情報理論などの分野で論じられることが多かった。だが、それらの枠組みそのものが、国民国家の枠組みや情報伝達の効率性と雑音の除去を原点にすえるシャノンの定理など、すでに提唱されて1世紀内外を経過した時代遅れの基準に依存しており、もはや現今の技術革新には対応できてない。理系の第一線の研究者も招きつつ、この危機を正面から見据えた問題検討の場とする点でも、本研究には**特有の意義**を認めうる。
 - (d) とりわけ、ここで提唱する「文理融通」とは従来までの効率主義的な「文理融合」の試みの失敗を負の経験として提唱したものである。理系の最先端の発見を文系の学問に活用する、あるいは反対に文系の問題意識を理系の技術開発に適用するといった方法論は、最初から文理の殻に捕われた発想であり、両者の垣根を乗り越えがたい。それは研究代表者が文化科学研究科の研究科長として運営に参画した総合研究大学院大学での試みからも明白である。むしろ多孔質のネットワーク、ないし網状組織の余白に散在する、一見無意味な空隙そのものの機能に注目し、「バケツ」のような機密性ではなく「ザル」のような選択的透過性のある場を設け、予期せぬ相互浸透の効果を有効化する発想の転換が求められる。これは現今の脳科学が提唱する記憶機構の仮説にも妥当し、また社会組織論の刷新にも寄与する意味で、**独創的な提案**を含むものと自負している。
 - (e) 教育面での提言や政策提言は、画餅におわっては無意味である。狭義の科学研究費補助金による研究遂行と並行し、総合研究大学院大学における文理融合の企画などとも協働し、実際の教育現場で、本研究の効能を実地に検証する作業も予定している。さらにこれを起点として、研究代表者が勤務している人間文化研究機構の「大学共同利用研究施設」としての本来の設置目的に照らし、今後の将来にむけたあるべき人間文化研究の方向と、大学共同利用研究施設の任務にかなった提言の具体化を視野に収めた研究であることも、本研究の顕著な**学術的特色と独創性**となる。
- 以上から**予想される結果と意義**としては、「うつわ」と「うつし」への注意を喚起することを通じ、「文理」それぞれの「器」相互の「融通」により、研究対象と研究領域との相互刷新を図り、新領域開拓や研究者間の共同体勢についても創生的な思考実験を根拠づける**意義**が期待される。

研究計画・方法

本欄には、研究目的を達成するための具体的な研究計画・方法について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、平成28年度の計画と平成29年度以降の計画に分けて、適宜文献を引用しつつ、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。ここでは、研究が当初計画どおりに進まない時の対応など、多方面からの検討状況について述べるとともに、研究計画を遂行するための研究体制について、研究分担者とともに行う研究計画である場合は、研究代表者、研究分担者の具体的な役割（図表を用いる等）、学術的観点からの研究組織の必要性・妥当性及び研究目的との関連性についても述べてください。

また、研究体制の全体像を明らかにするため、連携研究者及び研究協力者（海外共同研究者、科研費への応募資格を有しない企業の研究者、その他技術者や知財専門家等の研究支援を行う者、大学院生等（氏名、員数を記入することも可））の役割についても記述してください。

なお、研究期間の途中で異動や退職等により研究環境が大きく変わる場合は、研究実施場所の確保や研究実施方法等についても記述してください。

研究計画・方法(概要) 研究目的を達成するための研究計画・方法について、簡潔にまとめて記述してください。

本研究は、「研究目的」にあげた5項目の観点および課題にそって、適切な研究分担者を指定し、研究協力者に討議への参画をもとめる。このために必要な分科会を設けて、課題に対処したい。各々の課題を達成するためには、国内においても、自然系を含む異分野の研究者の参加が不可欠であり、また国際的な研究者網を活用することが、提言の発信や浸透にも必要である。「うつわ」と「うつし」をめぐる国際的なプラットフォームの構築と刷新に必要な条件を整備することが、本研究の目標達成には不可欠となる。ひとつの模範としては、学術振興会が欧州で実施してきた領域横断の国際研究集会、2015年であれば、Knowledge Transfer (Göttingen 大学)などが、情報交換、翻訳技法などの実際的 know how を含め、計画実現への具体的な方法として、基礎をなす。

研究代表者は、すでに「うつわ」と「うつし」の問題圏を学際的・領域横断的に研究するために、予備的な研究者集団として、総合研究大学院大学・学融合推進センター研究費助成プロジェクト「日本における諸科学の変成と基礎概念の検討-文理統合の有効性を探る」の最終年度とりまとめを担当した経験がある。本企画は、終了後、制度的改変のため継続はされていないが、その折の蓄積を本研究計画においても発展的に活用したい。ここでは「エネルギー」「情報」「生命」「科学政策」の4本の柱が取り上げられた。しかしそれぞれのテーマごとに分科会を構成する方式では、全体としての情報の融通に不適切が生じ、それぞれの分科会が孤立する傾向を避けがたかった。このため、今回は、上記の5つの課題ごとではなく、それを交叉する以下の分科会を暫定的に立ち上げ、研究の進展にともなって、「ザル構造」のネットワークへと柔軟に流動性を持たせて研究を展開する予定である。3年後の研究終了時には、この出発点は発展的に変容される予定である。

- (A)「情報」: 情報の恒常性と伝達にともなう可変性: シャノン理論の乗り越えに向けて
- (B)「枠組み」: 枠組み設定と選択的透過性: 「バケツ理論」から多孔質「ザル理論」へ
- (C)「インドラ網」: 華嚴経モデルの有効性と危険性: 狭義の「因果律」から広義の「縁起」へ
- (D)「輪廻転生」: 輪廻転生史観と時代錯誤 (anachronism): 主体の自己同一性とその限界
- (E)「接触界面」: 屈折・吸着・発散をめぐって: poiesis の場としての異質接触の臨界表面

各分科会の研究課題:

(A)「情報」

研究分担者: 大西宏志

研究協力者: 近藤高弘

海外研究協力者: Yuko Kikuchi

Information とは定義からして form へと加工された体裁を必要とする。だが日本の教育や常識では、data と information の違いもきちんと意識されていない。しかし他方、欧米における information の定義は、Plato, Aristotle の伝統を暗黙のうちに引き摺っており、eidos と hyre の区別に加えて morphe という要素が加わる。だが非欧米語への翻訳ではこうした事態は閑却に付されることが多い。デザイン工学の立場でこれに批判的な見解を述べた学者には Wilem Flusser が知られるが、その学説の批判から出発して、「うつわ」に汲まれつつ「うつり」ゆく情報の流れと、その過程での変質、付加価値、交換価値の形成の機構を問い直す作業が必要となる。同一の情報も発信者と受信者とは意味作用が異なる。だがその落差が情報理論ではとかく見落とされる。ここで情報理論の基礎をなす Claude Shannon の定義への再考が要求される。議論には国立情報学研究所の研究者（総合研究大学院大学・情報学専攻担当者）にも助力を仰ぐ予定である。菊池氏は英国でデザイン研究史の編集者として著名であり、近藤氏・大西氏からは実際の現場の造形作家として知見を得る。

研究計画・方法 (つづき)

(B)「枠組み」

研究分担者：鞍田 崇

研究協力者：阿部宏慈

海外研究協力者：大橋良介

ロボット工学の frame problem にも知られるとおり、枠組みの設定と情報とには相互依存関係がある。哲学の伝統でいえば、Jacques Derrida が ergon (作品) と parergon (作品の外部) との交渉を脱構築的に論じることにより、Immanuel Kant の『判断力批判』の基礎を掘り崩す精緻な仕事をなしている。だがこうした思索が情報工学と連携して考察される機会は乏しい。デリダの著書の訳者である阿部氏を研究協力者に招き、また「民藝」を通じてデザイン思想の枠組みを問い直している鞍田氏を研究分担者に、「器」と「中身」の弁証法について、具体例に即して検討したい。比喻として、ジクソーパズルの欠けたピースの空隙をいかに埋めるかがデザインの問題となるが、これは追って、分子生物学などの領域での生体や免疫系の自己定義、細胞膜の選択透過性に関する議論、ナノ次元の多孔質の物質表面における情報の授受に関する議論とも接続する。この部分では、総合研究大学院大学・生命科学研究科の研究者、専攻長経験者の協力を仰ぐ予定である。

(C)「インドラ網」

研究分担者：三原芳秋

研究協力者：末木文美士・金子務

海外研究協力者：Abraham George

華嚴經のインドラ網の比喻は、部分と全体を考える場合の古典的なモデルのひとつとして著名だが、非仏教圏では必ずしも一般に知られているとは言えない。各々の構成要素には、その他のすべての構成要素が何らかの姿で反映しており、反対に各々の構成要素の姿もまた、全ての他に映じているという相発相映のイメージだが、この比喻は機械論的な因果論がなお支配的な欧米の学会では頭ごなしに拒絶される場合が多い。だがここには何重もの誤解とともに、機械論モデルの限界も露呈する。南方熊楠や宮沢賢治から近年の素粒子物理学まで、インドラ網の理解には深い蓄積がある。それを単なる東洋学の学識に留めるのではなく、クラウド開発の情報学の刷新に連結したい。研究協力者に仏教学の権威、末木氏、科学史家の金子氏を迎え、キリスト教徒として宮沢賢治研究に造詣深い George 氏を海外からの協力者として、「多即一」の問題に踏み込みたい。三原氏 (英文学・批評理論) は、スピノザ-ベルクソン-ドゥルーズを通じて西洋における「多即一」の (異端的) 存在論を研究しており、その洞察を華嚴的存在論へと接続する枠組みを構築するため研究分担者に指名する。

(D)「輪廻転生」

研究分担者：堀まどか

研究協力者：三浦俊彦

海外研究協力者：Ranjana Mukhopadhyaya

輪廻転生もまた、ともすれば迷信として片づけられる概念である。だが論理学者の三浦氏によれば、輪廻転生の蓋然性を否定することも、またその存在を積極的に支持することも、ともに形式論理学には不可能である。とりわけ日本では今昔物語、源氏物語、浜松中納言物語から近代の中村真一郎、三島由紀夫に至る文学の系譜が無視できない。これは西欧近代の identity 概念を古代哲学まで遡って問い直す話題であり、Gille Deleuze 『差異と反復』や Georges Didi-Huberman の「時代錯誤」論とも絡む。「うつわ」に盛られて「うつり」ゆく「うつしみ」の転変は、変身や憑依などの身心現象・病理の考察にも通ずる幾多の問題を宿している。日本の新宗教研究で知られる Mukhopadhyaya 氏を海外研究協力者の核として、輪廻転生観念について問い直しを試みたい。

(E)「接触界面」

研究分担者：鶴戸 聡

研究協力者：河本英夫

海外研究協力者：Dennitza Gabrakova

華嚴のインドラ網の比喻により、個体と全体との空間的連携が問い直され、また輪廻転生の哲学的な再検討から、個体の時間軸上の異同に関する常識が揺るがされると、自己と他者の区別に関する常識的な世界像が安定を失い、流動的かつ微分された意識の世界が前景化し、そもそも異質な存在同志の界面でいかなる交換がなされるのかが、あらためて問題となってくる。オートポイエシスの検討から「界面」について、医療行為もふくめて広範な知識と実践体験を有する河本英夫氏を研究協力者に迎え、また海外からは、異界接触の研究にさまざまな方向から着手している Gabrakova 氏を招いて、本件について掘り下げを試みたい。鶴戸氏にはイスラーム思想とマグレブ圏文化接触現象の研究者としての立場から、議論の組み立てにご協力を仰ぐこととなる。

研究計画・方法(つづき)**平成 28 年度の計画**

初年度は、上記の計画にそって、研究分担者を中心に、研究協力者、海外研究協力者の助力を得て、問題の共有を計りたい。別途立ち上げる予定の、国際日本文化研究センターにおける共同研究会の参加者(約 20 名)にも議論への参加を要請し、そこで具体的に浮上した問題について、科学研究費を用いて、必要な調査・研究を遂行する。

さらに、総合研究大学院大学の自然科学系の研究者の参画を得る予定である。

平成 29 年の計画

- (a)初年度に予定する分科会での研究の進捗に沿って、上記に掲げた当初の課題設定で不十分だった論点などを補正する。分科会の構成をこれによって再調整し、研究協力者を再配置する。
- (b)研究会本体の報告書を、最終年度終了までに刊行することを目標として、準備にかかる。
- (c)研究分担者・協力者からの情報に基づき、本研究に直接関係する国際学会などが開催される場合には、本研究会から workshop などを提案し、可能な範囲で発表し、発信と情報収集に充てる。

平成 30 年、最終年度の計画

- (a)予算および日程が許す範囲で、可能ならば必要な討論のため国際研究集会を開催する。
- (b)研究会報告書の公刊を、できれば商業出版として、最終年度終了までに軌道に乗せる。
- (c)海外の大学出版会などでの研究書の刊行は、審査手続きの日程などの関係から、科学研究費補助金交付期間内に実現することは不可能である。このため、平成 29 年に(c)が実現した場合には、可能な範囲で、非売品の研究報告書などを、科学研究費補助金に許される範囲内で編集する。

研究が当初計画どおりに進まない時の対応など

大規模な国際的研究集会の実施が不可能な場合、あるいは船団を組んでの国際学会への参加が受け入れられなかった場合には、研究分担者、研究協力者の散発的な個別学会への参加により対応する。研究分担者、研究協力者ともに海外での学会活動に豊富な経験を有する研究者であるため、このような代替案による対処によっても、当初の計画に遜色ない成果をあげるように企画した。

学術的観点からの研究組織の必要性・妥当性及び研究目的との関連性について

A.「情報」とB.「枠組み」とは、「うつわ」と「うつし」という概念によって文化的な事象、情報組織や造形活動を考察する場合に不可欠な問題設定であり、また日常的に疑問に付されることが少ないだけに、あらためて自然科学を含む関連諸領域との突合せが、手順として不可欠である。これに対して、C.「インドラ網」およびD.「輪廻転生」は、とりわけ自然科学の分野から見ると、一見いかにも唐突な問題意識と誤解されかねない。だがこれらは、ヒトによる認識の臨界点で否応なくその限界相に登場する現象であり、さらに量子力学や宇宙論で話題となった問題が、すでに古代哲学で話題となっていたことを証拠だてる。なにも最新の科学論の回答が古代にすでに用意されていたといった怪しげな「東洋神秘論」回帰ではない。むしろ現代科学がなぜこうした問いの手前で足踏みをせねばならないのかを解明することから、いわゆる科学的思考の枠組み、限界が逆に炙りだされてくる。通常それは排中律あるいは矛盾律に違反しない範囲に「合理性」の定義を設けるといった説明で済まされる。だが「うつわ」と「うつし」による文化伝播を考えると、矛盾律や排中律を無前提の枠組みと看做す選択そのものの硬直・恣意性も見えてくるはずである。

ここに、学術的観点からみて、以上の研究組織を立てる必要性・妥当性及び研究目的との関連性が存する。総括としてのE.「接触界面」はまさにこうした思考および造形・情報処理の臨界点の界面を踏査することを目的とする。それは従来の東西価値観の対峙や、共約不可能性といった哲学的議論の限界の先に、両者の融通できる多孔質の学術の「場」を設定し、学術的な妥当性という認識の限界を直視し、その界面を活性化するという、本研究の設定目標にそった設計である。

今回の研究計画を実施するに当たっての準備状況及び研究成果を社会・国民に発信する方法

本欄には、次の点について、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。

本研究を実施するために使用する研究施設・設備・研究資料等、現在の研究環境の状況

研究分担者がいる場合には、その者との連絡調整の状況など、研究着手に向けての状況（連携研究者及び研究協力者がいる場合についても必要に応じて記述してください。）

本研究の研究成果を社会・国民に発信する方法等

研究会打ち合わせ、予定する国際研究集会などには、主として研究代表者の所属機関である、国際日本文化研究センター(以下、日文研)を、設置目的に沿って活用する。国内外の貴重書、研究書を豊富に揃えた日文研の図書室を研究分担者、研究協力者が利用することが可能である。

-1 研究分担者とは、平成 26 年度から日文研内外で、本研究会の準備をすすめており、事前の連絡調整は滞りなく進行している。さらに平成 27 年度から予定している日文研における共同研究会の班員には、本科学研究費の研究分担者あるいは研究協力者となっていただくことで、了解をとりつけているところである。

-2 総合研究大学院大学の理系関係者とも、研究代表者が研究科長を務めた時代より研究計画を諮り、議論を詰めている。

-3 海外在住の研究者には、本件について照会中であり、研究協力について内諾を得ている。

-1 研究分担者、研究協力者および海外からの招聘者による講演会を予定する。

-2 その傍ら、国内外で研究成果をまとめた論文集、冊子などの刊行を予定している。これにより知見、提言を国民のみならず、理系・文系を跨ぎつつ、内外の社会に発信することが可能である。以前研究代表者が関わった、金子務・鈴木貞美(編)『エネルギーを考える：学の融合と拡散』(非売品及び作品社、2013 年)に準じた公刊形態をめざしたい。

研究計画最終年度前年度の応募を行う場合の記入事項 (該当者は必ず記入してください(公募要領 2 1 頁参照))

該当しない場合は記入欄を削除することなく、空欄のまま提出すること。

本欄には、研究代表者として行っている平成 28 年度が最終年度に当たる継続研究課題の当初研究計画、その研究によって得られた新たな知見等の研究成果を記述するとともに、当該研究の進展を踏まえ、今回再構築して本研究を応募する理由(研究の展開状況、経費の必要性等)を記述してください(なお、本欄に記述する継続研究課題の研究成果等は、基盤 A・B (一般) - 1 0 の「これまでに受けた研究費とその成果等」欄には記述しないでください。)

研究種目名	課題番号	研究課題名	研究期間
			平成 年度 ~ 平成 28 年度

当初研究計画及び研究成果等

応募する理由

研究業績

本欄には、研究代表者及び研究分担者がこれまでに発表した論文、著書、産業財産権、招待講演のうち、本研究に関連する重要なものを選定し、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり、発表年(暦年)毎に線を引いて区別(線は移動可)し、通し番号を付して記入してください。なお、学術誌へ投稿中の論文を記入する場合は、掲載が決定しているものに限ります。

また、必要に応じて、連携研究者の研究業績についても記入することができます。記入する場合には、二重線を引いて区別(二重線は移動可)し、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり記入してください(発表年毎に線を引く必要はありません。)

なお、研究業績については、主に2011年以降の業績を中心に記入してください。それ以前の業績であっても本研究に深く関わるものや今までに発表した主要な論文等(10件以内)を記入しても構いません。

例えば発表論文の場合、論文名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年(西暦)について記入してください。

以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。著者名が多数にわたる場合は、主な著者を数名記入し以下を省略(省略する場合、その員数と、掲載されている順番を 番目と記入)しても可。なお、研究代表者には二重下線、研究分担者には一重下線、連携研究者には点線の下線を付してください。

2015 以降

1. 【翻訳】三原芳秋 ゴウリ・ヴィシュワナタン「異他的知の枠組による世俗主義の再考」『言語社会』(一橋大学大学院言語社会研究科)第10号、2016年3月出版予定。(査読有)
2. 【単著】稲賀繁美 『接触造形論 触れ合う魂・紡がれる形』名古屋大学出版会、2016年2月出版予定、500頁。(書類審査有:印刷中)
3. 【招待講演】大西宏志 「アート&デザインによる地域活性化の試み〜モノ学・感覚価値研究会の活動から〜」韓国済州島シンポジウム *Technology and Value of Brand*、韓国済州島 MAISON GLAND ホテル、2015年10月15日-17日。
4. 【論文】稲賀繁美 「表現主義と気韻生動:北清事変から大正末年に至る橋本関雪の軌跡と京都支那学の周辺」『日本研究』第51集、2015年3月31日、97-125頁。(査読有)
5. 【招待講演】堀まどか 「「文化相対主義」の日本?——韓国で教える現場から」総研大・学術交流会、総合研究大学院大学(葉山)、2015年3月24日。
6. 【招待講演】堀まどか 「野口米次郎における象徴主義受容」「日本近代文学におけるフランス象徴主義——受容・模倣・創造」, 学習院大学(東京)、2015年3月14日。
7. 【展覧会】大西宏志 「Shrine Fish JLG & Shrine Fish Lumière」海賊史観から交易を検討する:国際法と密貿易-海賊商品流通の学際的・文明史的研究『うつわ(器)とうつし(写)うつろいゆく形の生命とその刻印』、パリ日本文化会館、2015年1月20日-25日。
8. 【招待講演】大西宏志 「霊媒(メディウム)としてのメディアアート」海賊史観から交易を検討する:国際法と密貿易-海賊商品流通の学際的・文明史的研究『時のうつわ、魂のうつし』、パリ日本文化会館、2015年1月23日。
9. 【招待講演】Satoshi UDO, *Le copillage du sujet chez Kateb Yacine: L'écriture archipelagique, ou la cosmographie comme « utsushi », Colloque international: Berceau du temps, Passage des ames*, Maison de la culture du Japon à Paris, 2015年1月。
10. 【論文】鵜戸聡 「無意味 なオブジェとしての伝統工芸品 - ミクロネシア連邦ポンペイ島におけるカピングマランギ系住民のハンドクラフト活動から - 」『南太平洋海域調査研究報告』No.56、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、2015年、75-78頁。
11. 【招待講演】三原芳秋 「スピノザを読む T. S. エリオットを読む」, 一橋大学語学研究室 月例研究会 第273回、2015年。
12. 【単著】鞍田 崇 『民藝のインティマシー』明治大学出版会、2015年、228頁。

2014

13. 【論文】堀まどか 「白鳥省吾と戦争— 民の声 までの距離」『日本学報』韓国日本学会 .No.99、2014年5月、259 - 271頁。(査読有)
14. 【展覧会】大西宏志 「擬態 蓮池と金魚」海賊史観から交易を検討する:国際法と密貿易-海賊商品流通の学際的・文明史的研究『続・物からモノへ』、遊狐草舎、2014年3月2日-8日。
15. 【論文】堀まどか 「ジョージ・メレディスの詩と日本近代—ハーンからヨネノグチへの継承と転換」『日本語文学』、2014年2月、405-425頁。(査読有)
16. 【招待講演】鞍田崇 "Are You Happy?", 8th Japanese-French Frontiers of Science Symposium, メッス(フランス) 2014年1月26日。
17. 【単著】稲賀繁美 『絵画の臨界—近代東アジア美術史の桎梏と命運』名古屋大学出版会、2014年1月10日、788頁。(書類審査有)
18. 【共編著】稲賀繁美, Philippe Bonnin, Nishida Masatsugu et Inaga Shigemi eds., *Vocabulaire de la*

研究業績(つづき)

- spatialité japonaise*, 日本の生活空間, Paris:CNRS Editions, Jan. 2014, 605pp. (査読有)
19. 【論文】鶴戸聡 「敗北を異言語に抱きしめる：金石範からムールード・マムリへ」『立命館言語文化研究』25 巻 2 号、2014 年、127-139 頁。(査読無・依頼原稿)
20. 【論文】Satoshi UDO, "Insularity in the Literary Imagination of SHIMAO Toshio, Yamamoto S. & Raharjo S. eds", *New Horizon of Island Studies in the Asia-Pacific Region*, Occasional Papers No.54, Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands, Vol.54, 2014, pp.75-78.
21. 【招待講演】Yoshiaki Mihara, "Ch'oe Chaesŏ's Invention of a 'Japanese' Literature, or How English Literature Helped a Colonial Korean Intellectual Collaborate with the Japanese Empire", Ghent University (Belgium), 2014.
22. 【共著】安藤雅信・大島文彦・小林和人・坂田和實・山口信博・鞍田崇・石倉敏明・井手幸亮、木・村宗慎・橋本麻里・広瀬一郎・三谷龍二・山本忠臣 『「生活工芸」の時代』新潮社、2014 年、173 頁。
23. 【論文】鞍田崇 「いまなぜ 民藝 か」『紫明』35 巻、2014、20-26 頁。(査読有)

2013

24. 【招待講演】Satoshi Udo, "Théâtre japonais entre son raffinement traditionnel et sa pratique folklorique", 第五回ベジャヤ劇場国際フェスティバル・国際シンポジウム *Avant-théâtre et formes de la représentations du spectacle* (アルジェリア), 2013 年 11 月。
25. 【展覧会】大西宏志 「伽耶琴の雁足」モノ学・感覚価値研究会アート分科会『カオスモス 韓国の作曲家と日本の芸術家による音と形の展覧会』、遊狐草舎、2013 年 7 月 27 日。
26. 【国際発表】Hori Madoka, "Overseas Transmission and Reception of Japanese Performing Arts: Yone Noguchi's translation of Noh and Kyogen", International Comparative Literature Association Congress (ICLA 2013/AILC2013), Sorbonne Université (Paris), July 19, 2013.
27. 【共編著】稲賀繁美, Philippe Bonnin, Nishida Masatsugu et Inaga Shigemi eds., *Pour un Vocabulaire de la Spatialité Japonaise*, the 43rd International Research Symposium, May 11-13, 2012, International Research Center for Japanese Studies, March 28, 2013, 230pp. (査読有)
28. 【論文】堀まどか 「野口米次郎の能の紹介と、ゴードン・クレイグの雑誌『マスク』」『国文目白』(日本女子大学)第 52 号、2013 年 3 月、62-73 頁。(査読無)
29. 【論文】Inaga Shigemi, "Wybrane zagadnienia współczesnej sztuki Dalekiego Wschodu z punktu widzenia filozofii kegon," *W kręgu wartości kultury Japonii-W140. rocznicę urodzin Nishidy Kitarō(1870-1945)* 日本文化 - その価値観の多様性 西田幾多郎生誕 140 周年記念シンポジウム Redakcja Naukowa, Agnieszka Kozyra, Wydawnictwa Uniwersytetu Warszawskiego, 2013, pp.283-317. (査読有)
30. 【論文】鶴戸聡 「喩としての「海上の道」：詩的言語の空間想像力」『比較民俗学会』Vol.第 52 輯、2013 年、3-32 頁。(査読有)
31. 【博士論文】Yoshiaki Mihara, *Reading T. S. Eliot Reading Spinoza*, Cornell University, 2013, 370p.
32. 【招待講演】三原芳秋 「de Man de-manned —生態学的視点からド・マン再読を試みる、ならば」(企画パネル「ポール・ド・マン没後 30 年」表象文化論学会) 2013 年。

2012

33. 【学会発表】UDO Satoshi, 'Comparative Possibilities between Korean and Algerian Literatures: Yi Kwang-su and Mouloud Feraoun', KAMES&AFMA International Conference, Pusan (Korea), December, 2012. (査読有)
34. 【招待講演】鶴戸聡 「「アルジェリア人」とは誰か? : 植民地期の「人種」と「ナショナルイテ」」, 京都大学人文科学研究所主催・国際シンポジウム「人種神話を解体する」, 2012 年 12 月。
35. 【招待講演】大西宏志 「モノ学・感覚価値研究会アート分科会の活動」国際日本文化研究センター稲賀班共同研究会『21 世紀 10 年代日本文化の軌道修正』, 国際日本文化研究センター、2012 年 4 月 26 日。
36. 【編著】稲賀繁美 『東洋意識 夢想と現実のあいだ 1887-1953』ミネルヴァ書房、2012 年 4 月 20 日、594 頁。(査読有)
37. 【論文】Hori Madoka, "Yone Noguchi Overseas Transmission and Reception of Japanese Performing Arts in the Transitional Period of the 20th Century", *Towards Oriental Theatre Studies*, (Jahangirnagar University), March, 2012, pp.38-52. (査読無)

研究業績(つづき)

38. 【招待講演】大西宏志 「森・人 森・街 をつなぐ京都のキャラクター」京都伝統文化の森推進協議会『京都の森と地域文化創造の過去・現在・未来』、京都大学稲森財団記念館、2012年2月28日。
39. 【展覧会】大西宏志 「映像の町家」京都・京町家ステイ・アートプロジェクト、(株)庵 石不動之町家、2012年1月21日-27日。
40. 【論文】Shigemi Inaga, "Crossing Axes: Orientalism and Occidentalism in Modern Visual Representations of Manchukuo (1931-1945)," Evgeny Steiner ed., *Orientalism/Occidentalism: Languages of Cultures vs. Languages of Description*, Moscow, Sovpadenie, 2012, pp.93-114. (査読有)
41. 【単著】堀まどか 『「二重国籍」詩人 野口米次郎』名古屋大学出版会、2012年、592頁。
42. 【論文】三原芳秋 「『普遍主義』 『普遍性』 : 啓蒙 国民文学」(韓国語・張世眞訳)『韓国學研究』(仁荷大 學校韓国學研究所) 27 輯、2012 年、77-102 頁。(査読有)
43. 【招待講演】三原芳秋 「『普遍主義』と『普遍性』のあいだ — スコットランド啓蒙と『国民文学』」(国際シンポジウム「近代東アジアの普遍主義の動向を問う」)、仁荷大 學校(韓国)、2012年。
44. 【編集・共著】鞍田崇 + 編集部編 『<民藝>のレッスン つたなさの技法』フィルムアート社、2012年、205頁。

2011

45. 【招待講演】大西宏志 「デジタルとアナログの間」総合デザイナー協会『デジタル・デザインフォーラム』、電通大阪支社、2011年12月3日。
46. 【編著】Shigemi Inaga, *Artistic Vagabondage and New Utopian Projects: Transnational Poietic Experience in East-Asian Modernity (1905-1960) : Selected Papers from the XIXth Congress of the International Comparative Literature Association*, Seoul, 2010, Expanding the Frontiers of Comparative Literature, August 15-21, 2010, Chung-Ang University, Seoul, Korea, March 31, 2011, 138pp. (査読有)
47. 【編著】Shigemi Inaga, *The 38th International Research Symposium: Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of "Asia" under the Colonial Empires* (東洋美学と東洋的思惟を問う: 植民地帝国下の葛藤するアジア像), International Research Center for Japanese Studies, March 31, 2011, 388pp. (査読有)
48. 【論文】堀まどか 「野口米次郎の「世界意識」とその行方—ラドヤード・キプリングを対照に—」『日本女子大学大学院の会誌』第29号、2011年3月、1-9頁。(査読無)
49. 【論文】Hori Madoka, "Yone Noguchi and India: Towards a Reappraisal of the International Conflict Between R.Tagore and Y.Noguchi", *Changing Perceptions of Japan in South Asia in the New Asian Era: The State of Japanese Studies in India and Other SAARC Countries* (国際シンポジウム報告書), March, 2011, pp.119-128. (査読無)
50. 【論文】鵜戸聡 「アラブ・フランコフォニーと越境の文学: アルジェリア、レバノン、エジプト」、土屋勝彦編『反響する文学』、風媒社、2011年、19-59頁。(査読有)
51. 【論文】三原芳秋 「『国民文学』の問題」『JunCture 超域的日本文化研究』第2号、(名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター)、2011年、106-118頁。(査読有)
52. 【論文】三原芳秋 「Metoikos たちの帝国 — T. S. エリオット、西田幾多郎、崔載瑞」『社会科学』第40巻第4号(同志社大学人文科学研究所)、2011年、1-42頁。(査読有)

2010 以前

53. 【共編著】稲賀繁美・モノ学・感覚価値研究会アート分科会編『物気色 (MONOKEIRO)』美学出版、2010年12月1日、96頁。(査読無)
54. 【著書】三原芳秋 (洪宗郁 訳)「崔載瑞 Order」渡辺直紀・黄鎬徳・金応教(編)『戦争する臣民、植民地の国民文化』ソミョン出版、2010年、61-126頁。
55. 【編著】稲賀繁美 『伝統工芸再考: 京のうちそと—過去発掘・現状分析・将来展望 (Traditional Japanese Arts & Crafts: A Reconsideration from Inside and Outside Kyoto)』思文閣出版 2007年7月25日、833+xxvii頁。
56. 【項目執筆】三原芳秋 「T. S. エリオットの批評」「スピノザと文学理論」ほか、大橋洋一(編)『現代批評理論のすべて』新書館、2006。

これまでに受けた研究費とその成果等

本欄には、研究代表者及び研究分担者がこれまでに受けた研究費（科研費、所属研究機関より措置された研究費、府省・地方公共団体・研究助成法人・民間企業等からの研究費等。なお、現在受けている研究費も含む。）による研究成果等のうち、本研究の立案に生かされているものを選定し、科研費とそれ以外の研究費に分けて、次の点に留意し記述してください。

それぞれの研究費毎に、研究種目名（科研費以外の研究費については資金制度名）、期間（年度）、研究課題名、研究代表者又は研究分担者の別、研究経費（直接経費）を記入の上、研究成果及び中間・事後評価（当該研究費の配分機関が行うものに限る。）結果を簡潔に記述してください（平成26年度又は平成27年度の科研費の研究進捗評価結果がある場合には、基盤 A・B（一般）- 11「研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性」欄に記述してください。）。

科研費とそれ以外の研究費は線を引いて区別して記述してください。

科研費

研究種目名：基盤研究（A）

期間（年度）：平成 25-27 年度

研究課題名：海賊史観から交易を検討する

：国際法と密貿易 海賊商品流通の学際的・文明的的研究

研究代表者：稲賀繁美

研究経費：平成 25 年度...16,200 千円 平成 26 年度...9,700 千円 平成 27 年...12,000 千円

計 37,900 千円

研究成果：海賊行為をここ五百年世界史の再構築という視点から見直すとともに、南欧・西欧の世界覇権への非西洋側の抵抗をこの世界史再定義に組み込む。これに伴い国際法などの制定過程を再検討し、現今の著作権法、複製権の問題を IT 革命、電子情報ネットワークの全球的配備との関係で問い直し、問題点を指摘した。ここには西洋基準の学術と共約性のない地域性をいかに扱うかの方法論も関係する。研究代表者および分担者は、これらの課題に関して世界各地で学会発表をするとともに、研究論文集を複数刊行し、現在、最終的な論文集を刊行準備中である。以下にそのうち発刊済みのものを幾つか挙げる。

- a. 『絵画の臨界：近代アジア美術史の桎梏と命運』名古屋大学出版会、2014 年、581 + 189 頁(科学研究費による成果の一部)。
- b. *Réceptacle du passage: ou la vie transitoire des formes et ses empreintes*, 20 au 24 janvier 2015, Maison de la culture du Japon à Paris(科学研究費補助金による企画)。
- c. 国際学会会議 『グローバル時代と東アジアの文化表象()』漢陽大学東アジア文化研究所 ソウル 2015 年 2 月 6-7 日(科学研究費補助金による国際学会への参加・発表)。
- d. Philippe Bonnin, Nishida Masatsugu et Inaga Shigemi eds., *Vocabulaire de la spatialité japonaise*, 日本生活空間, Paris:CNRS Editions Jan. 2014, 605pp (論文集)。
- e. 「交易の海賊史観にむけて：美術品交易を中心にして」徐興慶編 『日本学研究叢書 8・近代東アジアのアポリア』国立台湾大学出版中心 2014 年 1 月 123-152 頁 (論文集への寄稿)。

研究種目名：基盤研究（A）

期間（年度）：平成 22-24 年度

研究課題名：「東洋」的価値の許容限界：「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶」

研究代表者：稲賀繁美

研究経費 平成 22 年度...10,900 千円 平成 23 年度...7,500 千円 平成 24 年度...4,200 千円

計 22,600 千円

研究成果：アヘン戦争期から日本敗戦後の講和条約締結までの時期に限定し、西欧からの衝撃とそれにたいする東洋の反応が、東洋側に「東洋」的価値の顕揚を促すと同時に、欧米世界に憧憬と反発とを招いた状況を、政治学、外交史、美学、美術史などの多領域にわたって具体的に検証し、「東洋」の蹉跌と再生への可能性を、国際的環境との相関において考察した。成果報告としては、研究分担者、研究協力者の個別の学術論文のほかに、以下を刊行し、成果を国内のみならず国際的に発信した。

- a. 『東洋意識：夢想と現実とのあいだ』2012, 594 頁
- b. *Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of "Asia" under the Colonial Empire* International Research Center for Japanese Studies, March 31, 2011, 388pp..
- c. *Artistic Vagabondage and New Utopian Projects: Transnational Poietic Experience in East-Asian Modernity (1905-1960)* :Selected Papers from the XIXth Congress of the International Comparative Literature Association, Seoul, 2010

研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性

- ・本欄には、本応募の研究代表者が、平成26年度又は平成27年度に、「特別推進研究」、「基盤研究(S)」又は「若手研究(S)」の研究代表者として、研究進捗評価を受けた場合に記述してください。
- ・本欄には、研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性(どのような関係にあるのか、研究進捗評価を受けた研究を具体的にどのように発展させるのか等)について記述してください。

人権の保護及び法令等の遵守への対応 (公募要領 4 頁参照)

本欄には、研究計画を遂行するに当たって、相手方の同意・協力を必要とする研究、個人情報の取り扱いの配慮を必要とする研究、生命倫理・安全対策に対する取組を必要とする研究など法令等に基づく手続が必要な研究が含まれている場合に、どのような対策と措置を講じるのか記述してください。

例えば、個人情報を伴うアンケート調査・インタビュー調査、提供を受けた試料の使用、ヒト遺伝子解析研究、組換え DNA 実験、動物実験など、研究機関内外の倫理委員会等における承認手続が必要となる調査・研究・実験などが対象となります。

なお、該当しない場合には、その旨記述してください。

本研究は、著作権・複製権等についても取り扱う予定をしているが、特定の相手方の同意・協力を必要とするものではなく、また個人情報等に関する内容等を取り扱わないため、人権保護、法令順守に該当しない。

研究経費の妥当性・必要性

本欄には、「研究計画・方法」欄で述べた研究規模、研究体制等を踏まえ、次頁以降に記入する研究経費の妥当性・必要性・積算根拠について記述してください。また、研究計画のいずれかの年度において、各費目（設備備品費、旅費、人件費・謝金）が全体の研究経費の 90% を超える場合及びその他の費目で、特に大きな割合を占める経費がある場合には、当該経費の必要性（内訳等）を記述してください。

設備備品費については、書籍購入のために、初年度は統括班および 5 つの分科会ごとに 20 万円（ $20 \text{万} \times 6 = 120 \text{万円}$ ）、平成 29・30 年度には統括班および各分科会 24 万円（ $24 \text{万} \times 6 = 144 \text{万円}$ ）を計上する。また、総括事務およびイメージ資料の処理作業に必要となる PC を初年度に 1 台購入し（38 万円）、研究分担者 5 名には、PC 資料処理に必要な周辺機器関係購入費用を計上する（ $6 \text{万} 6 \text{千} \times 5 = 33 \text{万円}$ ）。氏名記載研究協力者の 6 名は、すでに評価のさだまった高名な研究者、活躍中の先端の研究者からなる。研究協力者には、分科会運営の業務は免除するため、設備備品費を個別に給付することはしない。

旅費については、1) 各分科会の運営・打ち合わせのため、代表者+研究分担者 5 名の計 6 名 × 年 1 回 × 1 回 5 万円 = 各年 30 万円が各年次に必要。2) 代表者+研究分担者の 6 名に関しては、国外の関連学会での発表・資料収集のための渡航費用・滞在費として、各年次、各 15 万円が必要。（ $15 \text{万} \times 6 = 90 \text{万円}$ ）3) 研究協力者 6 名の海外調査、国内打ち合わせのための旅費・滞在費については、各自、20 万円（国内 5 万、海外 15 万）が各年次必要となる。（ $5 \text{万} \times 6 + 15 \text{万} \times 6 = 120 \text{万円}$ ）4) 各年次、計画に列挙した海外研究者 5 名を招聘する予定である。そのため、 $40 \text{万} \times 5 = 200 \text{万円}$ を各年次に計上する。

28・29 年度の研究成果の編纂に和文・英文校閲謝金 30 万円、印刷費分科会ごと 12 万円（ $12 \text{万} \times 5 = 60 \text{万円}$ ）を計上する。最終年度には、報告書編纂のために、分科会ごとに自主編集による和・欧文論集を刊行する。そのための費用として、分科会ごとに印刷費 40 万円（ $40 \text{万} \times 5 = 200 \text{万円}$ ）と、翻訳の業者発注経費 60 万円、校閲謝金 30 万円の必要が発生する。

本研究公開用のホームページを立ち上げる。専門家の意見を入れつつ、初年度に立ち上げをおこなう（70 万円）。次年度には管理運営をすすめる（40 万円）のと並行して、データベースを作成し（30 万円）、最終年度にも追加修正・改良を加えつつ管理運営する（40 万円）。研究成果を広く内外の研究者コミュニティーに継続的に発信・還元していきたい。

かなり大規模な分科会・国際研究集会を組織する企画であり、研究遂行のため、事務補佐員 2 名を 1 日 5 時間週 3 日雇用する必要がある。また、この事務補佐員が、ホームページ関連の業務にかかわることにより、速やかな研究成果の発信が可能となる。

28・29 年度には、研究資料の複写、写真・画像の撮影・加工のため、代表者と協力者 6 名の計 7 名分として、各自 10 万円を計上する。（ $10 \text{万} \times 7 = 70 \text{万円}$ ）

基盤 A・B (一般) - 13
(金額単位：千円)

設備備品費の明細			消耗品費の明細	
記入に当たっては、基盤研究(A・B)(一般)研究計画調書作成・記入要領を参照してください。			記入に当たっては、基盤研究(A・B)(一般)研究計画調書作成・記入要領を参照してください。	
年度	品名・仕様 (数量×単価)(設置機関)	金額	品名	金額
28	書籍		外付け HD(バックアップ用・ポータブル型・1TB)	
	「情報」関連書籍	200	@1万5千円×6 (代表者1名+分担者5名分)	90
	「枠組み」関連書籍	200		
	「インドラ網」関連書籍	200		
	「輪廻転生」関連書籍	200		
	「接触界面」関連書籍	200	USB メモリー-32GB	
	統括	200	@5千円×3本×6 (代表者1名+分担者5名分)	90
	* ~ は、各分科会に相当する。			
	PC(デスクトップ)Microsoft Office 搭載 大画面@38万円×1 (代表者1名分)	380		
	Adobe Photoshop CC デバイス L36MLev1@4万3千円 Adobe Acrobat pro DC 2015 Lev1@2 万3千円 * 6万6千円×5 (分担者5名分)	330		
(京都造形芸術大学、 明治 大学、 一橋大学、 大阪市 立大学、 鹿児島大学、 国際 日本文化センター)				
計		1,910	計	180
29	書籍		モノクロトナーカートリッジ	
	「情報」関連書籍	240	@4万1千円×6 (代表者1名+分担者5名分)	246
	「枠組み」関連書籍	240		
	「インドラ網」関連書籍	240		
	「輪廻転生」関連書籍	240		
	「接触界面」関連書籍	240	カラーインクカートリッジ	
	統括	240	@2万6千円×3色=7万8千円 ×6 (代表者1名+分担者5名分)	468
	* ~ は、各分科会に相当する。			
	(京都造形芸術大学、 明治大学、 一橋大学、 大阪市立大学、 鹿児島 大学、 国際日本文化センター)			
	計		1,440	計
30	書籍		モノクロトナーカートリッジ	
	「情報」関連書籍	240	@4万1千円×6 (代表者1名+分担者5名分)	246
	「枠組み」関連書籍	240		
	「インドラ網」関連書籍	240		
	「輪廻転生」関連書籍	240		
	「接触界面」関連書籍	240	カラーインクカートリッジ	
	統括	240	@2万6千円×3色=7万8千円 ×6 (代表者1名+分担者5名分)	468
	* ~ は、各分科会に相当する。			
	(京都造形芸術大学、 明治大学、 一橋大学、 大阪市立大学、 鹿児島 大学、 国際日本文化センター)			
	計		1,440	計

基盤 A・B (一般) - 14

(金額単位：千円)

旅費等の明細 記入に当たっては、基盤研究(A・B)(一般)研究計画調書作成・記入要領を参照してください。								
年度	国内旅費		外国旅費		人件費・謝金		その他	
	事項	金額	事項	金額	事項	金額	事項	金額
28	研究打ち合せ 5万円×6(代表者1名+分担者5名分)	300	海外資料調査 及学会発表 15万円×6(代表者1名+分担者5名分)	900	事務補佐員雇用 6千円×3日/週×48週×2名	1,728	研究成果印刷費 12万円×5(分科会5班)	600
	研究打ち合せ 5万円×6(協力者6名分)	300	海外資料調査 及学会発表 15万円×6(協力者6名分)	900	成果論文校閲 謝金(和文)	150	資料複写・加工費 10万円×7(代表者1名+協力者6名分)	700
			研究打ち合せ 40万円×5(海外協力者5名分)	2,000	成果論文校閲 謝金(英文)	150	ホームページ 作成費	700
	計	600	計	3,800	計	2,028	計	2,000
29	研究打ち合せ 5万円×6(代表者1名+分担者5名分)	300	海外資料調査 及学会発表 15万円×6(代表者1名+分担者5名分)	900	事務補佐員雇用 6千円×3日/週×48週×2名	1,728	研究成果印刷費 12万円×5(分科会5班)	600
	研究打ち合せ 5万円×6(協力者6名分)	300	海外資料調査 及学会発表 15万円×6(協力者6名分)	900	成果論文校閲 謝金(和文)	150	資料複写・加工費 10万円×7(代表者1名+協力者6名分)	700
			研究打ち合せ 40万円×5(海外協力者5名分)	2,000	成果論文校閲 謝金(英文)	150	ホームページ 管理費	400
	計	600	計	3,800	計	2,028	データベース 作成費	300
計	600	計	3,800	計	2,028	計	2,000	
30	研究打ち合せ 5万円×6(代表者1名+分担者5名分)	300	海外資料調査 及学会発表 15万円×6(代表者1名+分担者5名分)	900	事務補佐員雇用 6千円×3日/週×48週×2名	1,728	研究成果報告 論文集印刷費(和・欧文) 40万×5(分科会5班)	2,000
	研究打ち合せ 5万円×6(協力者6名分)	300	海外資料調査 及学会発表 15万円×6(協力者6名分)	900	成果論文校閲 謝金(和文)	150	翻訳業者委託費	600
			研究打ち合せ 40万円×5(海外協力者5名分)	2,000	成果論文校閲 謝金(英文)	150	ホームページ データベース 管理費	400
	計	600	計	3,800	計	2,028	計	3,000

研究費の応募・受入等の状況・エフォート

本欄は、第2段審査(合議審査)において、「研究資金の不合理な重複や過度の集中にならず、研究課題が十分に遂行し得るかどうか」を判断する際に参照するところですので、本人が受け入れ自ら使用する研究費を正しく記載していただく必要があります。本応募課題の研究代表者の応募時点における、(1)応募中の研究費、(2)受入予定の研究費、(3)その他の活動について、次の点に留意し記入してください。なお、複数の研究費を記入する場合は、線を引いて区別して記入してください。具体的な記載方法等については、研究計画調書作成・記入要領を確認してください。

「エフォート」欄には、年間の全仕事時間を100%とした場合、そのうち当該研究の実施等に必要となる時間の配分率(%)を記入してください。

「応募中の研究費」欄の先頭には、本応募研究課題を記入してください。

科研費の「新学術領域研究(研究領域提案型)」にあつては、「計画研究」、「公募研究」の別を記入してください。所属研究機関内で競争的に配分される研究費についても記入してください。

(1) 応募中の研究費

資金制度・研究費名(研究期間・配分機関等名)	研究課題名(研究代表者氏名)	役割(代表・分担の別)	平成28年度の研究経費(期間全体の額)(千円)	エフォート(%)	研究内容の相違点及び他の研究費に加えて本応募研究課題に応募する理由(科研費の研究代表者の場合は、研究期間全体の受入額を記入すること)
【本応募研究課題】 基盤研究(A)(一般) (平成28年度～平成30年度)	「うつわ」と「うつし」: 情報化時代の複製技術・藝術の美的範疇刷新にむけて (稲賀 繁美)	代表	8,518 (26,682)	30	(総額 32,682 千円)

研究費の応募・受入等の状況・エフォート(つづき)					
(2) 受入予定の研究費					
資金制度・研究費名(研究期間・配分機関等名)	研究課題名(研究代表者氏名)	役割(代表・分担の別)	平成28年度の研究経費(期間全体の額)(千円)	エフォート(%)	研究内容の相違点及び他の研究費に加えて本応募研究課題に応募する理由(科研費の研究代表者の場合は、研究期間全体の受入額を記入すること)
科学研究費助成事業・基盤研究(B)(一般)(平成26年度~平成29年度)	神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究 東西融和と民主主義の相克 (安藤 礼二)	研究分担者	50	5	宗教史研究であり、本研究とは、別個に遂行されてきたものである。
(3) その他の活動 上記の応募中及び受入予定の研究費による研究活動以外の職務として行う研究活動や教育活動等のエフォートを記入してください。				65	
合 計 上記(1)、(2)、(3)のエフォートの合計				100(%)	